

比叡山延暦寺建造物にみる 意匠の特殊性と古材利用

はじめに 奈良文化財研究所では2011年度から2か年にわたって比叡山延暦寺の全山建造物調査を計画している。延暦寺の建物については元亀2年（1571）の織田信長による比叡山焼き討ち以前の様子は先行研究で整理されているが、その後の復興の様子や現存する全山の歴史的建造物の把握はなされておらず、謎に包まれていた。

そのため、今回、初の試みとして延暦寺建造物、約250棟の悉皆調査をおこない、国宝・国指定重要文化財以外に56棟の歴史的建造物を確認し、これらの個別調査を計画した。その約6割に当たる32棟の個別調査を通じて、延暦寺の建物の特徴が徐々に解明されてきた。調査の途中段階であるが、この点について論じたい。

虹梁絵様の先進性 虹梁絵様は近世建築の年代を示す1つの指標であるが、滋賀県の近世社寺建築緊急調査（1982～1984年度）によると、近江における社寺建築の絵様繰形の意匠は、同時代の他の地域と比較すると保守的であるとされている。明暦3年（1657）建てられた滋賀県の大通寺本堂の絵様は、若葉と渦が分離しておらず、根元で繋がっており、古式を残す（図41）。これに対して、延暦寺に見られる絵様の意匠は、保守的というよりは先進的である。例えば、寛文2年（1662）に建てられた浄土院拝殿の内部虹梁の絵様は鐺の明瞭な木瓜型で、渦と若葉は完全に分離し、若葉も数多く枝分かれして左右に大きく広がる（図41）。両者を比較すると、浄土院拝殿の絵様の華やかさは一段と際立つ。一方、八坂神社本殿（承

応3年=1654）や萬福寺大雄宝殿（寛文8年=1668）など、京都の建物をみると、渦と若葉は分離しており、大徳寺仏殿（寛文5年=1665、図41）をみると、若葉の水平方向の広がりが大きく、彫り幅も大きく、近江よりも先進的である。概観すると、浄土院拝殿の絵様は若葉と渦の分離が早い点で京都の絵様に近く、さらに言えば、若葉の発達には、京都以上に先進的な意匠であるといえよう。

このことから、延暦寺の絵様の意匠は近江よりも京都の影響をある程度、受けたと推察できる。これを示す直接の史料は未発見であるが、伝教大師御廟の文化8年（1811）の修理棟札に京都御大工中井の名が記されており、比叡山と京都大工の関係を示す傍証の一つであろう。

また延暦寺では同時期、同一敷地内の一連の造営にも関わらず、絵様が大きく異なる事例がみられた。延暦寺の開祖である最澄を祀った、浄土院拝殿・伝教大師廟・伝教大師廟唐門の3棟は寛文2年（1662）前後に一連で造営されたが、これらの虹梁絵様は渦の形状・若葉の数・彫りの太さ・鐺の明瞭さ・袖切の形状のすべてで異なっており、多様である（図41）。建設時の棟札が残されていないため、造営大工は不明であるが、虹梁絵様の多様性は大工の違い、あるいは建物ごとに絵様を描いた可能性を示しているのかもしれない。

延暦寺型鐘楼 延暦寺の鐘楼には近世の一般的な鐘楼とは異なる特殊な形式があることが判明した。横川鐘楼（18世紀前期）・西塔鐘楼（18世紀中期）・明王堂鐘楼（明治27年=1894）の3棟は、柱を四方転びの角柱とし、各柱間には2本の角柱の間柱を立て、さらに隅柱と間柱を腰貫と飛貫で連結した、強固な構造とする（図42）。間柱を持つ



図41 虹梁絵様の比較（左から延暦寺浄土院拝殿・同唐門・同伝教大師御廟・大通寺本堂・大徳寺仏殿）



図42 延暦寺型鐘楼（左から横川鐘楼・西塔鐘楼・明王堂鐘楼）



図43 雲形肘木の比較（左から延暦寺文殊楼・同横川鐘楼・同西塔鐘楼・粉河寺大門）



図44 建立道場表門



図45 浄土院拝殿の小屋裏



図46 浄土院政所的小屋裏

類似例には東大寺鐘楼（承元年間＝1207～1210）や知恩院大鐘楼（延宝6年＝1678）があるが、ともに規模が大きく、間柱上に太い大梁を架け、鐘を吊る。延暦寺の3つの鐘楼では間柱上に大梁を架けないため、これらの形式とは根本的に異なる独自形式と考えられる。なお日光東照宮仮殿鐘楼（江戸前期）も延暦寺型鐘楼の特徴を示す。

このように延暦寺の鐘楼は通常の近世の一般的な鐘楼形式とは大きく異なり、さらに明治時代に入ってもこの系譜が受け継がれていることから、延暦寺特有の建築形式、すなわち延暦寺型鐘楼と評価できよう。

特殊な雲形肘木 かつて松本修自が指摘したように、延暦寺文殊楼・同横川鐘楼・同西塔鐘楼・浄国寺山門・粉河寺大門で雲形肘木が用いられている。この雲形肘木が、かつて「須濱肘木」と称されており、法隆寺の雲斗雲肘木の造形をモチーフとしたと述べている。

これらの4棟とも桁を受ける部分を双斗状とする点が共通する。特に横川鐘楼と西塔鐘楼では、大斗両脇が突出するという形状が酷似しており、延暦寺鐘楼の独自平面とともに組物意匠を模した可能性もあろう。

古材利用 延暦寺には歴史的建造物が多数、現存するが、その建設には大量の木材が必要である。特に元亀の焼き討ち後の復興時、16世紀後半～17世紀前半には多量の木材が必要であったが、この時期は全国的に木材が不足していた。これは延暦寺現大講堂（旧東照宮讃仏堂、寛永11年＝1634）において、部材の多くに古材を利用していることからうかがえる。

古材利用には主に絵様虹梁や組物などの化粧材の再利用と小屋組の再利用の2つの方法がある。前者の例は元三大師堂表門や建立道場表門に見られ、建立道場表門では虹梁・木鼻・大斗が古材の転用で、風食が一段と大きい（図44）。後者の例は浄土院政所や拝殿などである。拝殿では野母屋や束など、古材の利用は一部に限定されるが、政所では小屋組のほとんどを再利用しており、建物規模は旧建物と同規模と推察される。

どちらの手法であれ、軸部材に古材を用いた場合、規

模の変更への影響は少ない。継続的な造営活動がおこなわれつつも、山内の建造物群の景観が一変することなく、保たれてきた一因はここにもあろう。また古材利用は近代以降にもみられ、延暦寺建築の特徴の1つであろう。

なお個別調査を通じて古材利用は確認できたが、前身建物の部材を利用したのか、別の建物の部材を利用したのかについては判別できなかった。この点については今後、解体修理などのさらなる詳細調査に託したい。また材の多くを取替えた遺構を確認したが、この方法も古材利用と同様に、既存の建物を可能な限り修理して利用するという、造営方針の表れではないだろうか。

このように山内の通常活動に応じた古材利用は、比叡山の伝統的な景観の保持に少なからず影響を与えていた。この点は同時に延暦寺の継続的な造営活動を示しており、建物が歴史の重層性を物語っているのである。

おわりに これまでいくつかの指定文化財を除き、近世・近代における延暦寺の建物の実態はベールに包まれていたが、虹梁絵様に代表される意匠の先進性と古材利用という特徴が徐々にあきらかとなってきた。前者は延暦寺と京都大工の関係を示唆しており、当時の社会状況を映し出している。また特殊な雲形肘木や鐘楼の形式は、比叡山建築の独自性の表れであろう。後者の手法は近代以降も継続しておこなわれており、延暦寺の造営における質実な理念を示しているといえる。

このほか、近世の延暦寺の復興や造営の画期、さらには近代の復古様式による造営、活発な移築という側面も徐々にあきらかになっており、これらの点についても、今後の調査を通じて解明していきたい。（海野 聡）

参考文献

- 松本修自「近世の〔雲形肘木〕」『日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）』1992。
- 滋賀県教育委員会『滋賀県の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』1986。
- 和歌山県文化財センター『重要文化財 粉河寺大門修理工事報告』2002。